

全学共通教育についての自己点検・評価報告書（教育部会用）

教育部会名：農学教育部会

部会長名：山形 裕士

作成者名：山形 裕士

概要（2000 字）

●実施体制：農学部会では平成 18 年度から、教養原論、「生命と環境」の 1、2 年生向け講義を 2 科目担当している。対象学生のほとんどは、生物学や化学の知識が限られている人文・社会系学部や工学部、海事科学部などに属しているので、農学部の研究教育のキーワードである「食料・環境・健康生命」に関する話題を各講義数名の教員がオムニバス形式で親しみやすい内容を講述し、農学部が担う役割を理解してもらうことを目指している。

●開講科目：教養原論 生命と環境（食と健康・生物資源と農業）

●実施状況：

「食と健康」：開講日は、前期木曜日 1 限と後期火曜日 2 限。広い意味での「食と健康」についての話題を提供し、受講者に「食と健康」についての関心を深めてもらうことを目標に、前期は、担当教員 5 名（内、非常勤講師 1 名）が、①食と健康概論および食の機能性や安全性確保とそれに関する研究事例紹介、②ウィルス汚染や細菌汚染を中心とした食品衛生上の諸問題、③果実の生産および果実の成分や機能性、④農薬の安全性評価の仕組みと人に対するリスクの実態・作物や食品に含まれる天然化学物質と残留農薬の安全性評価・作物や食品に含まれる化学物質のリスクコミュニケーションと農薬 Q&A、⑤乳・肉・卵等の動物性食品の概説および動物性食品の機能性と健康、などの話題について講義した。履修届者数は 195 名であった。後期は、担当教員 5 名（内、非常勤講師 1 名）が、①食と健康概論および遺伝子組換え植物の作り方と種類・遺伝子組換え作物の安全性、②農薬の安全性評価の仕組みと人に対するリスクの実態・作物や食品に含まれる天然化学物質と残留農薬の安全性評価・作物や食品に含まれる化学物質のリスクコミュニケーションと農薬 Q&A、③微生物と発酵食品に関して微生物の利用法・発酵食品の特色および発酵食品工業における日本人の果たした役割、④キノコ類の保蔵条件による生理活性への影響・機能性多糖の免疫賦活化作用・アレルギー抑制と食品因子、⑤細菌性食中毒を中心として食の安全・安心に見る我が国の現況・動物に見る腸内細菌との共生・人の健康に資するプロバイオティクス細菌、などについて講義した。履修届者数は 197 名であった。

「生物資源と農業」：開講日は後期月曜日 1 限と木曜日 1 限。我々の生活を支える農業を科学する農学とその関連分野の役割について広く理解してもらうことを目的に、月曜日、木曜日とも各 4 名の教員が、農業生産のための資源植物の特性とその利用方法、資源植物の改良の歴史とその内容、安全で持続的な食料生産のための農業技術、などについて講義した。月曜日は、①土壌の特性、②植物の機能、③昆虫の機能、④資源植物の特性などについて、木曜日は、①作物の機能や生態、②環境と作物の相互作用、③食用作物の生産、④熱帯植物の特性、などについていずれもオムニバス形式の利点を生かし、幅広い視点から講義をした。履修届者数は、月曜日が 199 名、木曜日は 197 名であった。

「食と健康」、「生物資源と農業」の両科目とも、学生の出席状況、受講態度、理解度は概ね良好であった。学生の授業評価から判断して、いずれの科目も教育の成果と効果があったと考えられる。食糧問題や環境問題、食の安全性などに関心が高いこと

が授業評価にも反映していると推察される。

- 授業改善：「食と健康」の前期の講義室はK棟の202教室であった。昨年度は全員座れず床に座る学生もあったが、今年度は人数制限により改善された。後期の講義室はB109であった。入り口が教室の前方にあり、遅刻してくる学生の入室が目障りであった。次年度は20分以上の遅刻者の入室は原則認めないこととした。「生物資源と農業」の講義室は月曜日がB209、木曜日がB210であった。どちらも受講者数が昨年度より減少したために混乱はなかった。
- 今後の課題：オムニバス講義の利点を生かし、それぞれの分野の専門家による深い内容の講義が実施できた。反面、各担当者の講義が独立していたため、全体の連携を欠いていたと思われる。また、「生物資源と農業」では、一部の講師が講義日程を失念し無断休講が起きてしまい学生および関係者に多大な迷惑をかけた。教養原論に対する信頼を失うような失態であり深く反省している。講義の取りまとめ役の連絡不足も一因であり、今後は連絡を徹底して再発防止に努めたい。

様式2（続き）

項目・観点ごとの記述

基準5 教育内容及び方法

5-1-②： 授業の内容が、全体として教育課程の編成の趣旨に沿ったものになっているか。（○はい、いいえ）

（観点到に係る状況）

人文社会系学生を対象とした啓蒙的な内容の授業であるので、農学・農業全体を見通せる教員を配置し、基礎的な幅広い知識と最新の情報を提供している。

根拠資料

シラバス、配付資料

5-1-③： 授業の内容が、全体として教育の目的を達成するための基礎となる研究の成果を反映したものとなっているか。（○はい、いいえ）

（観点到に係る状況）

担当教員の専門性を基礎に研究内容とその周辺の現実の食の安全・安心の問題、農業問題、環境問題などの最新の話題などを配布資料やパワーポイントを活用し提供している

根拠資料

配付資料

5-1-⑤： 単位の実質化への配慮がなされているか。（○はい、いいえ）

（観点到に係る状況）

ほぼ毎回小テストを行うか、またはレポートを提出させた。学生の理解度の把握にその都度務めた。

根拠資料

小テスト、レポート

5-2-①： 教育の目的に照らして、講義、演習、実験、実習等の授業形態の組合せ・バランスが適切であり、それぞれの教育内容に応じた適切な学習指導法の工夫がなされているか。（例えば、少人数授業、対話・討論型授業、フィールド型授業、多様なメディアを高度に利用した授業、情報機器の活用、TAの活用が考えられる。）（○はい、いいえ）

（観点に係る状況）

受講者数が多すぎ、討論などは困難で一方通行の授業になるのはやむを得ない。プロジェクトを使い、表示を見やすく工夫するなど、後方からの視認効果を高める配慮をした。

根拠資料

5-2-③： 自主学習への配慮、基礎学力不足の学生への配慮等が組織的に行われているか。（○はい、いいえ）

（観点に係る状況）

人文社会系学部や工学部、海事科学部の学生を対象とし、関心をもってもらうことを目的とする啓蒙的科目であり、基礎学力は問わない。興味を持たせることが自主学習を促すことになる。

根拠資料

5-3-②： 成績評価基準に従って、成績評価、単位認定が適切に実施されているか。（○はい、いいえ）

（観点に係る状況）

出席状況および受講態度、小テストやレポートの提出により、概ね適切に評価している。しかし、200名近い人数の学生各人の理解度を正確に反映した成績評価は至難であり、さらに講師間で評価基準を統一することも困難である。最適な成績評価のためには講義人数を減らすしか方法がないと思われるが、現状で出来る限りの努力はしている。

根拠資料

試験答案、出席簿、レポート

基準6 教育の成果

6-1-③： 授業評価等、学生からの意見聴取の結果から判断して、教育の成果や効果が上がっているか。（○はい、いいえ）

（観点に係る状況）

履修希望者数が多いことから元々関心が高いことが予想されていたが、授業評価や成績が

らも講義の成果や効果が上がったことが示唆される。

根拠資料
授業評価

基準7 学生支援等

7-1-②： 学習相談，助言（例えば，オフィスアワーの設定，電子メールの活用，担任制等が考えられる。）が適切に行われているか。（○はい、いいえ）

（観点に係る状況）

履修者数が多くきめ細かいサービスはできないが、今後も電子メールを活用して出来る限り対応したい。連絡先メールアドレスはシラバスに記載しているが、質問などはほとんどなかった。

根拠資料